

聖ニコラウスと仮面異装の従者たち オーストリア共和国バート・ミッテルンドルフ村の民衆劇

山田 仁史

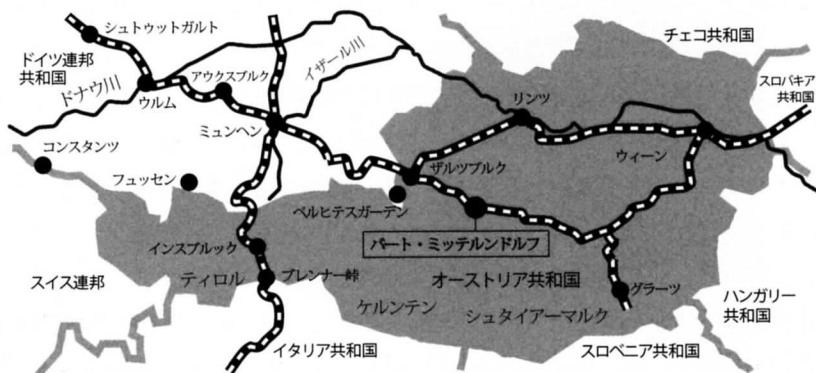
はじめに

1999年12月5日、私はオーストリアの山村バート・ミッテルンドルフ (Bad Mitterndorf) にいた。この日の晩、すなわち聖ニコラウス (St. Nikolaus) の日の前の晩におこなわれる民衆劇 (Volksschauspiel) を見るためである。この村では、その劇はニコロ劇 (Nikolospiel) と呼ばれている。ニコラウスというのは言うまでもなく、サンタクロースの元来の姿であるが、この地方のニコロ劇には、ニコラウスのお供としてクランプス (Krampus) という鬼のような者たちや、その他仮面異装の従者たちが登場し、人々、ことに女性たちや子供たちを木の枝の鞭で叩き脅かすという特徴がある。

このめずらしい祭については、広島大学のドイツ民俗学研究グループを中心とする研究者や写真家の手により、すでに日本語でいくつかの報告・紹介がなされている (谷口／遠藤 1982 : 64-65、遠藤 1990 : 21-24、福嶋 1990、谷口／遠藤 1998 : 20-23、芳賀 2003 : 72-84)¹。しかしその数は決して多いとは言えないし、内容も詳細にわたっているとはいいがたい。そこで今回は、まずこの祭についての私の採訪ノートから、現状をやや詳しく報告する。そして、村の資料館で入手したこの祭の解説パンフレットを紹介し、私自身が実見した祭の内容と比較してみたい。その上で若干の考察を加え、今後への研究課題を示したいと思う。

1 私の見たニコロ劇

バート・ミッテルンドルフは、オーストリア共和国シュタイアーマルク州 (Steiermark) に位置する小村である (地図1)。標高は海拔809メートル、人口は3200人余り、面積は112.5平方メートルであり²、バート・ミッテルンド



〈地図1〉Bad Mitterndorf の位置



〈地図2〉Bad Mitterndorf 村と鉄道・主要道略図（筆者作成）

ルフ地区とクルングル地区 (Krunzl) から成る (地図2)。主要産業は現在では観光業であり、夏は避暑地・ハイキングリゾートとして、冬はウィンタースポーツに力点を置く温泉保養地としてにぎわっている。

写真家の芳賀日出男によれば、1970年に氏が撮影に行った時には淋しい村で、まだ「ミッテルンドルフ」と称していた。ところが、2001年に氏の息子がクランプスの行事を撮影に行ったところ、たいへんな変わりようだったという。まず、村の名前がミッテルンドルフから「バート・ミッテルンドルフ」に変わっていた。それは温泉が噴き出したので、観光客を誘致するために「バート (温泉)」という名称をつけたのだそう。さらに、70年には小さな田舎のホテルがたった一軒しかなかったのに、いまは大ホテルが20軒以上も建ち並ぶ観光地になっていた。「昼間はスキーを、夜はホテルの温泉プールとデイスコで楽しむ若者が大勢集まるところになったのだ」(芳賀 2003: 81, 84)。ドイツ語圏で定評のある旅行ガイドの『バーデカー』には、1988年にバート・ミッテルンドルフに温泉が開かれたとあるから (Baedeker 1997: 312-313)、本格的な観光地化が始まったのはこのころからではないだろうか。

さて、1999年当時ミュンヘンに留学していた私は、鉄道でほぼ5時間かけてこの村までやって来た。途中、ザルツブルク (Salzburg) や、ヨーロッパの初期鉄器時代であるハルシュタット期の名称のもととなった湖畔の美しい村ハルシュタット (Hallstatt) にも立ち寄った。

まず、祭の一週間前にあたる11月27日 (土) から29日 (月) にかけて、下見に訪れた。15センチほどに積もった雪が溶けて凍結した路上を歩く。木々の葉の落ちた枝は凍りついてきらきらと光っていた。翌週のニコロ劇は、クルングル地区から開始されるという情報を得て、同地区へ向かった。すると、路上で中学生くらいの少年たちが3人、釣竿のような恰好の鞭をピシリ、ピシリと鳴らして遊んでいる。これは、ニコロ劇の本番でシャープと呼ばれる藁男が鳴らしつつ練り歩くことになる鞭である。いろいろ話していると、鞭やってみる？と言う。もちろん、と言って貸してもらったそれは、弾力のある本体の先

(写真1・2)
▼ 村の郷土博物館におさめられた仮面の数々 ▼
(以下、本稿の写真はすべて筆者撮影)



(写真3) 手に通行人を捕まえるクランプス ▼



から釣糸のようにゴムが伸び、そのまた先端に10センチほどの風糸(?)がついたもので、この風糸の部分がピシリ、ピシリと鳴るのだという。何度か試してみるが、なかなかうまい音が出ない。下手をするとゴムが自分の顔や手を打ってきそうな感じだ。それでも続けて見よう見まねでピュンピュンやっていると、やがて時折ピシリ、という音が出るようになってきた。同じ鞭は、ミュンヘンの著名なビアホールであるホーフブロイハウス (Hofbräuhaus) の演し物でも見たことがあったのを思い出した。

またこの下見の間に、村の中心部にある郷土資料館 (Heimatkundliche Sammlung) を見学することができた。父子二代にわたって集めた私設コレクションを管理しているシュトリック氏 (Strick) は、3階に置かれた多くの仮面も見せてくれた (写真1・2)。ニコロ劇で使われる仮面である。たいていはボック (Bock) の角がつけられ、恐ろしい形相をしたものだった。4、5キロはするよ、と氏は言う。なるほど重い。仮面をつけるのも楽じゃないなと思いつつ、展示室に集められた圧倒的な量の物が放つ独特の雰囲気魅せられていた。

この27日には、小さなクランプス行事がおこなわれた。19時を告げる教会の鐘が鳴りやむと、村の中心の200メートルくらいにわたって、この行事のため車が入れないようにしてある通りへ、恐ろしい仮面をつけ、身体を毛皮で覆った異形の鬼、クランプスたちが、手に手に小枝を束ねた鞭 (Rute) を持って現れてきた。彼らは子供たちを捕まえては、ブルルルーと鼻息も荒く、「祈れ! (Beten!)」と怒鳴り、鞭で腿を打ちすえる (写真3)。中にはこれをするりと避けて逃げる子供もいれば、それを追うクランプスもあり、素直に祈りの言葉を唱えて撫でてもらう子供もいる。これがおよそ1時間半にわたって続く。親子連れもいれば友だち同士でやって来ている10代もいる。村の人なのか観光客なのか分からないが、ビデオカメラを回している若者や、写真を撮っている女性もいた。私も何度か捕まり、腿をしたたか打たれた。けっこう痛い。20時ころになると、教会から手に手にアトヴェント・クランツ (Adventskranz) ——モミやドイツトウヒの枝を環状に編み、これに4本の蝋燭を立てたもので、

待降節（Advent）すなわちクリスマス前の1ヶ月間、毎週日曜日ごとにその1本に火をともしてクリスマスを待つことになっている——を持った人たちがぞろぞろ出てきた。主婦らしき人たちが多い。教会で頒布しているのだろう。中には、出てきたところをクランプスに打たれる人もいた。20時半ころになると、さすがにクランプスたちの動きも鈍くなってきた。子供たちも、あの仮面は誰それだ、などと言ったりして、正体を知って逆にクランプスを挑発したりし始める。ややあって、クランプスたちは仮面を脱ぎ始めた。中からは若者たちの顔が湯気に包まれて現れる。10代の少女たちは、中に誰が入っていたのか気になるようで、お喋りしつつも次々に正体を現す少年たちから目を離さない。自分を打ったあのクランプスは誰だったのか、知りたいのだろう。

下見の帰途での収穫を一つだけ記しておきたい。28日の晩、日の暮れたザルツブルクの町を歩いていた時である。旧市街のゲトライデ小路（Getreidegasse）にクランプスがいるのを発見した。若者が角のついた仮面と毛皮を身につけて歩いているのだ。その姿は、パート・ミッテルンドルフで見たのとさして変わらない。ここにもいるんだなあと思っていたら、通行人の男性に後ろから近づいて、わっと脅かしている。近くにいた子供はかわいそうに泣き出してしまった。また、気をつけて見ていると、通りのショーウィンドウにもクランプスが時折登場していた。たいていは可愛らしくデフォルメされた鬼の面だったが、中には荒々しい野性的なクランプスもいた（写真4）。所々にはポスターが貼ってあり、12月5日すなわちニコラウスの日の前夜には、ここでもクランプスの行列があることがわかった。ザルツブルクのような、洗練されたイメージの都市にもまだそういう習俗が残っているのはおもしろい。



▲（写真4）ザルツブルク市内のショーウィンドウに飾られた野性的なクランプスの面

次の週末の12月4日（土）、再び訪れたバート・ミッテルンドルフの家々の庭には、クリスマス・ツリーが立っており、イルミネーションの光を放っていた。12月1日に立てるのだという。私はツァウヘン集落（Zauchen）にあるホテルに泊まったが、その1階はレストランになっていた。ここのカウンターで、同集落到12年来住んでいるという男性に聞いたところによれば、ツァウヘン集落の人たちは1つの家族のようなものだ、という。なるほど、彼と話している間にも近所の人たち（恐らく）が入れ替わり立ち替わりやって来ては、親しげに挨拶をかわしたり、男たちのテーブルに仲間に入ったりしていた。明日のニコロ劇を見に来たんです、と言うと、それはいい、いい経験だ、と言い、ただし劇団の連中は1軒ごとにアルコールを引っかけて行くから、後の方になればなるほど騒がしくなる、また鍛冶屋役の男にハンマーで爪先を叩かれられないように気をつけなさい、と言われた。そういう役どころがあることは、翌日実際に見てよくわかった。

明くる日は、いよいよニコロ劇の当日である。劇は、17時にクルングル集落のラントホテル・カンツラー（Landhotel Kanzler）で開始され、18時にツァウヘンのガストホーフ・ノイヴィルト（Gasthof Neuwirth）——私はここに泊まった——、19時にテルル集落（Thörl）のヤークトホーフ・ヒュープラー（Jagdhof Hübler）というように場所を変えて同じ内容で上演されてゆく。それから村の中心部に入り、20時に郵便局わきの舞台上、そして最後は20時45分にディスコ・カスパラー（Disko Kasperer）という順序になっていた。

15時を回ったところから、ノイヴィルトの裏にある舞台に、今日のニコロ劇のための設営が始まった。壁にイエスの十字架像や鏡や時計を掛けたり、片隅にコンロ台を置き、その上に鍋を置いたりする仕事で、私も少し手伝った。やって来る観客のためのビールやグリューモース——Glühmaß？ 熱いワイン（Glühwein）に似ているが色は黄色っぽく、甘いアルコール飲料で、温めて飲んだり冷たいまま飲んだりする——の売場もホテル前に設営した。ひととおりの仕事が済むと、私はニコロ劇の第1会場となるクルングル集落へ向かった。会場となる宿屋カンツラーには、もう観客が大勢集まっていた。表には、



▲（写真5）行列をなしてやってくるクランプスたち



▲（写真6）左からハーバーガイス、クランプス、シャープ

先週鞭鳴らしをしていた少年たちの姿もある。マイナス1度、雪のちらつく中、ニコロ劇が始まろうとしている。

先に述べたように、ニコロ劇はバート・ミッテルンドルフの5つの集落で上演され、その間の区間は行列となる（写真5）。先払いのシャープ（Schab）は全身を麦藁に包まれた藁男で、頸のあたりには麦の穂が何本もついている。頭の上には、触角のような2本の藁棒が2、3メートルもの長さでニョキッと伸びている（写真6）。このシャープが例の鞭をピシリピシリと鳴らして先払いの役目を果たす。シャープは20人ほどもいる。彼らは演劇の中には登場せず、外で待っているだけである。ドイツ語でシャーブ（Schabe）はゴキブリを表す。藁棒がちょうどゴキブリの触角のように見えるので、これはゴキブリ男なのだろうかとは私は考え、この解釈の正否を村人たちに尋ねてみたが、否定的な答えしか返って来なかった。後でさらに調べてみると、ドイツ南部・オーストリア・スイスの方言でシャウプ（Schaub）という語が穀物の束や藁束を表すことがわかった。これの訛った形なのかもしれない。

さて、カンツラーの中はすでに物凄い熱気である。ホールの正面でニコロ劇が演じられるらしい。観客席の前方には子供たちが、親と同伴したりしなかったりして腰を下ろしている。私はホールの奥の方に入り込むことができた。観客の中にはカメラやビデオカメラを手にした男性が何人かいるが、報道陣とおぼしき人たちは見当たらない。いたとしても少数なのだろう。少年たちの話では、それでも以前にオーストリアの放送局が取材に来たことはあったという。

時計が17時を告げ、いよいよニコロ劇に先立つ先触れの男たちが3人、カンツラーのホールに入って来た。彼らはニコロ劇団（Nikolospielgruppe）のための寄付を集めて回る。それが終わると、いかめしい顔つきの設営係（Quartiermacher）が制服に身を包んで入って来て、カンツラーの主人に、これから仲間を入れてもよいかと訊く。どうぞ、という主人の快諾に続き、白馬に乗った白馬の騎士（Schimmelreiter）が現れ、ヒヒーン、ヒヒーンといながら劇の舞台によけいな人がいないようにする（写真7）。続いて赤ら顔で全身毛むくじゃらのクランプスが現れ、木の枝の鞭を振るいながらブルル



▲（写真7）白馬の騎士。後方は設営係



▲（写真8）左から天使、主任司祭、聖ニコラス巻き角鬼

ルルーッと鼻息荒く子供たちを脅かす。とそこへ端正な顔立ちの天使 (Engel) が入ってきてクランプスを制止、手には純潔を示す白百合の花と贖罪を表す棕櫚の葉を持っている。続いて入ってきたのは、赤いマントを着け、司教 (Bischof) の祭帽をかぶり、杖を手にした白髭の聖ニコラウス、そして眼鏡をかけ、手には聖書を持ち僧服を身に着けた主任司祭 (Pfarrer) がそれに付き従っている。まずニコラウスが、これから子供たちが学校の宗教の授業で教わったことを正しく理解しているかどうかテストするように、と司祭に命ずる (写真8)。

司祭のテストが始まった。彼は幼稚園児から中学生くらいの年齢の子供たちに、私の横に立っているこの方は何というの？ (答：聖ニコラウス) とか、クリスマス前の期間を何といいますか？ (答：待降節) とか、夕べのお祈りの言葉を唱えてみなさい、などと言って子供たちの知識と敬虔さをテストする。中には、君の名前は何というの？と訊かれたただけなのにもう「ベツレヘム」などと答える子供がいたり——これは「キリストの生まれた所はどこ？」と訊かれたらそう答えるように親から繰り返し言われていたからだろう——、宗教の授業を受けていますか？と訊かれて、はい、でも落第点でした、などと言わずもがなの返事を返す子供がいたりして、観客の笑いを誘っていた。こうしてテストがひととおり済むと司祭は、みんなよく勉強しているようだが、今日はちょっと緊張していたせいか、いま一つだったね、などと言い、それからプレゼントの分配が始まるニコラウス、司祭、設営係、それに微笑した仮面のバルテル (Bartel) が用意してきた袋を子供たちに配るのだ。中身はピーナツ、蜜柑、林檎、お菓子、といった具合である。子供たちはみな嬉しそうにプレゼントを受け取る。なごやかな雰囲気包まれる時である (写真9)。しかしこれだけで終わりにならないところが、このニコラウス劇のおもしろいところでもあり、奥深いところでもある——少なくとも私にはそう思えた。なぜなら、ここから舞台は暗い死の世界へと一変してしまうからだ。

「司祭どの！ (Herr Pfarrer!)」と訛り丸だしのしゃがれ声とともに、乞食 (Bettelmann) がよぼよぼと現れる (写真10)。薄汚れた衣服に身を包み、垢にまみれた顔と手。胸ポケットには小さい酒瓶が入っている。彼は司祭に、自



▲ (写真9) バルテルたちが子供たちにプレゼントを手渡す



▲ (写真10) 司祭と乞食



▲ (写真11) 死神の大鎌が乞食の肩に振り下ろされる

分が天国へ召されるようにお願いします、と頼む。司祭は、もちろん助けになってやるから懺悔しなさい、と言うが、乞食は懺悔などしないと言い、酒をあおっているばかり。と、その後ろへ音もなく現れたのは、大鎌を研ぐ死神 (der Tod) の不気味な姿だ。死神はされこうべの頭と骸骨の身体である。この死神が大鎌を研ぐ音が、シャアッ、シャアッと気味悪く響くが、乞食はまったくそれに気づかない。と、不意に大鎌が乞食の肩に振り下ろされ (写真11)、乞食は声を立てることもできず、一瞬にしてどつと崩れ落ちる。どかどかとしてきた2匹のクランプスが乞食の死体を運び去る。会場がしーんと静まりかえる中、司教ニコラウスは訓戒を与える。これこそは罪ある者の末路である。彼は、いつでも品行を改めることなどできるさ、と嗤っていつこうにそれを実行しなかったのだ。しかし死神は深い夜の底から現れて、汝らを裁きの場へ引き出すのである。皆心して、あの世へ行く心構えを怠らぬがよい、と告げるのである。

訓戒が終わるや否や、今度は毛むくじらで頸の長い奇怪な悪魔 (Teufel) が現れ、子供たちを脅して回る (写真12)。小さい子供たちの中には泣き出す子もいる。さらに、次に登場するのは悪魔たちの王ルーツィファー (Luzifer)。この悪魔はあまりにも凶暴なので、従うクランプス2匹が鉄の鎖の縛めで必死に引き留めなければならないほどだ (写真13)。悪魔は自分の力の強大さをさんざん誇った挙げ句、みな地獄へ堕ちろ！と叫ぶ。するとそれを合図に30匹ほどのクランプスたちがどやどやと会場の観客たちの中へ乱入し、鞭で叩いてはさんざんに荒れ狂うのである。

ひとしきりして夜警がラッパを鳴らす (写真14)。するとようやくクランプスたちはしぶしぶ引き揚げてゆく。しかしそこへ鍛冶屋が現れて、這い回ってはハンマーで人々の爪先を叩いて回る。これは、後から鍛冶屋氏に聞いたところによれば、むかし妻の不義に怒った鍛冶屋が妻を釘で床に打ちつけ、外に出られないようにしたのが始まりだとのことだった。

ともかくこうしてニコロ劇は終わり、次の会場へと行進が始まる。行進の途中では、シャープやクランプスが家々の門口に立ち寄ることもある——これは家々に祝福を告げる意味だろうか。そして行列のしんがりには獵師がおり、ま



▲ (写真 12) Eheteufel



▲ (写真 13) ルーティファーを鎖で引き留める2匹のクランプス



▲ (写真 14) ラッパを鳴らす夜警

た村人たちや私のような見物客も行列に同行する。中にはヴィーンから来たという老夫婦がいた。また東アジア系らしい女性が写真を撮っているのも見かけた。クランプスたちは、行進の途中でも人々を容赦なく打ちすえる。仮面を外して休憩しているクランプスを見ると、年輩の人もいる。クルングルで会った少年たちによれば、19歳以上にならないとニコロ劇には参加できないそうだ。また獵師氏の話によれば、仮面は常に新しいものが作られているものの、中には40年ないし50年、あるいは100年以上になる仮面もある、とのことだった。さらに、クランプスたちの中に混じって奇怪な山羊（Geißただし発音はGoas）の頭部を戴いたハーバーガイス（Habergeiß）の恰好をした男も2人おり、どういう意味なのかと聞いてみたところ、「山羊は豊穡（Fruchtbarkeit）をもたらすのだ」との答えであった（写真6）。

以上が、私が1999年12月に見学したニコロ劇の記録である。もっと簡潔に記述しようかとも思ったが、何よりも現地の雰囲気伝えることに主眼を置いたため、長文にわたることになった。

さて、バート・ミッテルンドルフ村の郷土資料館を訪ねたことは先に述べたが、ここで私は、ニコロ劇を説明するパンフレットを手に入れた。次にこのテキストを紹介したい。ここには上述した私の記録と重複する部分も多いが、それを補う記述も見られるばかりでなく、現地の人々がそれぞれの場面や行為をどのように解釈しているのかが知れて、たいへんおもしろく貴重な資料を提供してくれているからである。

2 ニコロ劇の解説パンフレットの内容³

次に掲げるのが、この解説パンフレットの全文を私が試みに訳したものである。執筆者の署名はなく、ニコロ劇団と締めくくられているにすぎない。また執筆年代も不明であるが、バート・ミッテルンドルフではなく単にミッテルンドルフと表記されていることから、村名が変わる以前に書かれたものと見られる。

12月5日

12月5日

12月5日

12月5日

ミッテルンドルフのニコロ劇

シュタイアーマルク州ザルツカンマーグート地方の古俗

巨大で高く聳えるグリミング山とどっしりしたラヴィーネンシュタイン山の間に包み込まれ、冬を前にした暗い夜にはひっそりと静まりかえり、穏やかさに満ちながら、霜に凍てつく野のただ中に、ミッテルンドルフ村はある。初冬の黄昏、あらゆる音がくぐもりつつ静寂を突き抜け、時折そそくさと通り過ぎる足音、何者かがぎしぎしと蝶番を軋ませる扉。ニコロの晩だ！

不意に、鋭い鞭の音がひとつ、ふたつ、みつつと続き、ほとんど圧迫するような静けさを引き裂く。そこへ鈴の音と鈍い響きが混じり合い、ものすごい騒ぎにまで高まってゆく。ニコロ劇の行列がやって来るのだ。そこにはもう「シャープ」が来ている。藁ですっかり覆われた奇妙な姿に、何メートルもの巨大な角を頭上に付けている。六拍子で鞭をパチリと鳴らし、藁をカサカサとさせながら、彼らはゆっくり堂々と行列の先触れをし、道を空けるのである。

シャープに続く行列の残りの者たちは、ペアになって行く。まずは警察の制服に身を包んだ設営係——行列の秩序維持は彼の仕事だ——と、カンテラ・矛槍・ホルンを持った夜警。次に、白馬にまたがった白馬の騎士と、頭に羽冠をつけ子供達へのお菓子でいっぱい籠を持ったバルテル。バルテルは、どこから見ても微笑んでいる仮面をかぶっている。さらに我々が目にするのは、献金

袋を手にした聖物管理人と、星の衣装を着て手に百合を持った天使であり、大枝を持つ巻き角鬼に付き添われる。それから、司教の祭服を着た聖ニコラウス、その横を歩むのは主任司祭殿。曲がった杖の乞食と大鎌の死神とが次のペアである。他に、豊穡の象徴としてのハーバーガイス（山羊頭の怪物）と、金槌をもった鍛冶屋。この鍛冶屋は煤をつけた奴で、あらゆる物を釘で打ち付けて（固定して）しまう。これらの後に、さまざまなクランプが続く。まずは三叉矛を持った地獄の王者ルーツィファー自ら出現。彼は鎖で、二人の小さなクランプによって押さえられている。その横にいるのは、ひどく頸の長い結婚の悪魔。それらの後、残りのクランプたちが、現地のアマチュアの手で芸術的に彫られた仮面をつけて続く。最後にニコロの猟師が、クランプたちの秩序が保たれるように気を配る。

ガストハウス（宿屋兼料理店）の大部屋には、もうぎっしりと大勢の子供たちが集まっている。子供たちは勇敢に微笑して、不安を隠そうとする。そこへシャープが、窓のすぐそこまでガサガサとやって来る。大部屋の中は静かになり、子供たちのテーブルではピンの落ちる音が聞こえるほどの静けさだ。力強い足音を立てて設営係が大部屋に入ってくる。彼は店主に、白い仲間（ニコロ）と黒い仲間たち（クランプスたち）を引き入れてもいいかと尋ねる。同意を得ると、夜警が輝くカンテラを持ってやって来る。彼は時を告げ、火と灯りに注意するよう警告する。続いて白馬の騎士がテーブルの前の空いた場所を巡回し、それによって悪霊を部屋から象徴的に追い払う。

だしぬけに扉がぱっと開かれ、巻き角鬼が勢いよく入ってくる。子供たちのテーブルでは、彼の出現は恐れ驚くに足るもので、最年少の何人かは、もうテーブルの下に姿を隠してしまっている。隠れた子らがこっそり様子をうかがっていると、天使は恐い仲間たちを引き下からせ、それから厳かに「イエス・キリストに讃えあれ」と唱えつつ司教ニコラウスが主任司祭とともに現れる。穏やかだがぎっぱりした声で、司教は教導と訓戒の言葉を子供たちと大人たちに言い渡す。「説教」の最後に彼は、教理教師殿（＝主任司祭）に、子供たちが学校で何を習ったのか、テストして確かめるように頼む。このテストが上司たる

司教の満足のゆくものであれば、バルテルがその微笑み続けている仮面と大きな背負い籠を持って戸口に現れる番だ。長い髪束が顔と羊皮の服にかぶさっている。彼が贈り物を子供たちに配っていると、みすばらしい声が聞こえてくる、「司祭どの、司祭どの、司祭どの、お願いです、ちょいとお願ひしますだ」。こう言いながら、乞食が「懺悔」を願ひ出る。自分のあらゆる恥ずべき行いを彼は話し出す、その際それら非行をできるだけ害のないように見せかけようと努める。するとそこへ、煤けた料理屋の狭い場所で、古きイエーダーマンの運命、すなわちいつかいつかと言うばかりで、いつでもあの世に召されうことを認めようとしなかった貧しい男の死という運命が、再現される。乞食の対話の最中に、彼の背後に振り上げた大鎌を持った死神が現れ、その命に終止符を打つ。ただちに二匹のクランプスが出て来て、乞食を料理屋から連れ出してしまふ。司教はもう一度、真剣な訓戒の言葉を集まったすべての人々に告げる、たった今起こったことを肝に銘じるようにと。そして彼は、主任司祭とともに料理屋から出てゆくのである。

するとその場は暗黒の力に委ねられ、低くうめきつつ足踏みする「結婚の悪魔」がひどく荒れ狂い出す。「俺様は結婚生活の悪魔だ」、と彼は自分の説教を開始する。その中で彼は、結婚生活を破壊するために自分がどんなことをしてかすかを語る。そうこうしているうちにも、外はますます騒がしくなっている。ルーツィファーはほとんど自分を抑えきれなくなり、結婚悪魔が終えるやいなや、自分を鎖で押しとどめる二匹のクランプスをぐいぐい引っ張りつつ、部屋に飛び込んでくる。彼は三叉矛を床に荒々しく打ちつけ、それから行う「説教」も荒っぽいものである。おしまいに彼は、外で待っているクランプスたちに中へ入りここにいる全員を地獄へ連行しろと要求する。無法な騒乱状態が引き起こされる。クランプスたちは冗談ごとでは済ませられない。彼らは木の枝の鞭を持っていて、それで叩かれると痛いのだ。そのころテーブルの下では煤で黒くなった鍛冶屋が這い回り、隠れようとするもの全てを釘で打ちつける（固定してしまふ）。ハーバーガイスは、男たちにも女たちにも嫌がらせをして回る。

しかしその時、夜警のホルンの合図が響き渡り、この大騒ぎを収束させる。

しぶしぶながらクランプスたちは部屋を立ち去り、彼らの支配は終わりを告げる。彼らは、野外で巨大な魔物たちを見張っているシャープたちのもとへ殺到する。改めて行列が作られ、次の料理屋へと向かって進む。これがすなわち、ミッテルンドルフのニコロ劇なのである。

この劇は、木彫りの貴重な仮面と、古くから毎年同じように引き継がれ大切に守られているテキストとによって、非常に独特な性格を獲得している。この本物の習俗がその古い姿のままで、ミッテルンドルフにおいてこれからも長く保存されてゆくことを願うばかりだ。

ミッテルンドルフ・ニコロ劇団

万一事故が起きても責任は負いません！

このパンフレットを読んで、疑問が生じる部分もあれば、納得できる部分もあったし、新たに問題を提起されたと感じた部分もある。まず難解だったのが、原文でRollenträgerという語である。Rolleには「巻いたもの」という意味があるので、「巻いた角」を「戴く者」Trägerと解釈して「巻き角鬼」とここでは訳している。実際、写真8や写真10・11で見ると天使の横に立っている鬼がこのRollenträgerに当たると思われる。しかし私は、現地で劇を見た時にはこれはクランプスだと解釈していた。また、頸の長い悪魔が「結婚の悪魔(Eheteufel)」(写真12)というのも、どうしてここに結婚生活を破壊する悪魔が登場するのか、今ひとつ解せない。

新たに納得できたのは、白馬の騎士が舞台を巡回する行為の意味について、「悪霊を部屋から象徴的に追い払う」と記してある部分である。演じる当人たちによってこのような解釈がなされていることを知った。

一番大きな問題として立ち現れたのは、乞食が殺されることになったのを「古きイエーダーマンの運命」と表現している点だった。『イエーダーマン

(Jedermann)』とは中世の宗教劇である。金持ちのイエーダーマン（人みな
の意）が、死の問題などにはいっこう無頓着で、うかうかと暮らしていたが、
はなやかな宴会の最中に死神の訪れをうけ、友人も親戚も財産も彼を見捨てる
なかに、ただわずかなよい行為と信仰だけが彼とともに神の前に進み出て彼を
弁護しようとし、彼は罪を悔いて、謙遜に墓に向かうという、オーストリアの
文豪フーゴー・フォン・ホーフマンスタールの『イエーダーマン』（1903-11
年成立）はこの中世劇をもとにしている（手塚／神品 1993：263）。

ニコロ劇を見た時点では、私は『イエーダーマン』についての知識を持って
いなかった。そのため、乞食が死神に殺されるというあの場面が、中世の宗教
劇にまで結びつくものであることに、まったく気づいていなかった。しかし、
村を後にしてから少しずつ関連の文献を読み、ドイツ語圏の民俗学を勉強して
ゆくうちに、「民衆劇」という概念があることを知った。そして、現在ドイツ
語圏の各地で行われる「民衆劇」——日本であれば「民俗芸能」とでも言う方
がぴったりくるかもしれない——の中には、中世以来、宗教劇や都市の演劇、
学校の劇などに由来するものも少なくないことを知ったのである。このことは、
後にやや詳しく論じたい。

3 若干の考察

ここまで、特定の祭に限定して話を進めてきた。けれどもこのような仮面異
装の者たちが跋扈する祭というのは、時期が12月5日の晩に限られるわけ
でも、パート・ミッテルンドルフという1つの村に限られるわけでもない。中欧
(Mitteleuropa) にはこのような行事が広く分布しているのである。

『ヨーロッパの仮面』というすぐれた図録をまとめたベルリン欧州諸文化博
物館のカトリーン・アードラーによれば、ヨーロッパの年中行事の中で仮面が
用いられるのは、11月11日の聖マルティン (St. Martin) の日——この日は
冬至の40日前であり、俗に熊が冬籠もりを始める日とされている——からイー
スターにかけての期間である。その期間中にもいくつか、特に仮面がかぶられ
る日が存在する。12月5日・6日（聖ニコラウス）、12月12日・13日（聖ルー

ツィアLuzia)、クリスマスと新年の間の6夜、1月6日(三博士顕現日)、2月2日(聖燭祭、熊の冬眠終了日とされる)、2月3日(Blasius)。ドイツ南部・オーストリア・オランダ・イタリア南部などでは、聖ニコラウスが非常に人気を集めており、その祭日12月6日には異形の従者を連れたニコラウスが子供たちに贈り物をする慣習が広まっていた。しかしニコラウスは次第にクリスマス男(Weihnachtsmann)と融合し、サンタクロースとしてクリスマスに贈り物をもたらすように変わってきた。また、クリスマスの頃の他に仮面行列が見られるのは、四旬節(Fastenzeit)の始まる前、すなわちカーニヴァルの時である。さらに、イースターの時期にも仮面行列がなされる所もある(Adler 1999: 41, 43)。

オーストリアの冬から春にかけてのさまざまな祭について記した、日本人による早期の観察としては、民族学者の岡正雄によるものがある。1929年から35年までと38年から41年までの合わせて8年近くヴィーンに住んだ岡は、「オーストリアの年中行事に、日本のそれに類似し併行するものの多いのに興味をそそられ、ときどき田舎を歩いていくつかの行事を見聞した」。岡によれば、

十二月から一月にかけての行事や習俗は、教会暦や異教の行事暦が混合し、重り合い、同じような行事がくり返えされる。十二月に入ると仮面仮装の異形のものが出現し訪来し始めるが、これはよほど古い習俗らしく、おそらくゲルマン族以前のドナウ農耕民の文化に発するものではないかと思われる。仮面仮装者の訪来といい、靈魂の動揺・往来といい、その他不思議なほど、日本の十二月から一月にかけての行事に類似するものが多い。十二月六日は「サンクト・ニコラス」(St. Nikolaas [ママ])の日で、ウィーンの郊外などでは、今でも日が暮れると路地から白い聖衣をきたニコラス聖者と頭に角をつけた赤い顔の、黒衣あるいは毛皮をまとった「クランプス」(Krampus)という鬼が現われる。クランプスが子供を脅かしたり叱ったりすると、ニコラスがクランプスをなだめて、菓子や乾無果実(いちじく)などを子供に与えるのである。サンタ・クロースの、元の姿をとどめているのであろう。この日クリスマスと同じように、ちょっとした贈り物

をする（岡 1979：283-284）。

岡のこの記述の背後に、日本民俗学における柳田国男や折口信夫の来訪神論からの強い影響があることは、すでにクライナー（1985：3、1991：2-3）が指摘したとおりである。しかし寡作だった岡は、日欧の来訪神の比較という問題をこれ以上発展させようとはしなかった。

さて、聖ニコラウスに付き従って現れる異形の従者たちには、様々な名称がある。ここに岡が記し、バート・ミッテルンドルフで私が出会ったクランプスというのは、その一例にすぎない。ドイツ語圏におけるこれら異形の鬼たちの名称は、地図3に示したとおりクランプスのほカルプレヒト、バルトルなど多種多様である。彼らは毛皮を着ていたり、袋をかつぎ鞭を手にした姿であったり、あるいは鎖をじゃらじゃら鳴らしながら、あるいはエンドウマメの藁をカサカサ言わせながらニコラウスの後について登場する。そして、悪い子供は袋につめて連れ去ってしまうとか、鞭で懲らしめるとかいうふうに、子供たちには大いに怖れられる存在なのである（Wrede 1935：1093-1099）。

このような聖ニコラウスとその従者たちは、これまで様々な側面から研究されてきた。以下ではそれらを、(1)異教とキリスト教の対立、(2)仮面異装の意味、という2つの点について見てゆきたい。

(1) 異教とキリスト教の対立

すでに福嶋（1990）によって指摘されているように、ドイツ民俗学の先駆者であったヤーコブ・グリムやヴィルヘルム・マンハルトはこの習俗を、キリスト教以前の異教時代に起源するものと見た。グリムによれば、「異教の時代、神が現れて幸運や平安を告知したときに、妖精（alb）や小人（zwerg）が従者としてそばに仕え、民衆に神の祝福を具体的に伝えたと考えられる。……（中略）……キリスト教の時代になって、キリストや聖母が施し物をするに際して、はじめは聖者をそばにはべらせたが、この聖者がいつの間にかまた昔の妖精（kobold）や荒々しい人物に墮落していったのだろう」（Grimm 1875-78 I：426）。他方マンハルトは、新年と冬至のころに現れる異形の者たちのうち、

藁の仮装や山羊の頭部を着けた仮装に着目し、これらを穀物霊の表現と解釈した (Mannhardt 1905 : 183-200)。

民族学者のゲオルク・ブشانも、ニコラウスの日の習俗について論じる際、異教時代とのつながりに目を向けた。つまり彼によれば、鬼の恰好をしたクランプスは古い時代の人物、おそらくは異教時代の人物なのであり、ルブレヒトはたぶん古ゲルマンの神々につらなる人物なのである (Buschan 1922 : 20)。

こうした異教的行事とキリスト教的行事とを対立させてみる見方は、その後日本のゲルマニストたちに受け継がれてきた。たとえば谷口幸男によれば、ヨーロッパの祭は2つにわけて考えることができる。その1つは、キリスト教の教会行事と結びついた祭であって、復活祭、聖霊降臨祭、マリア昇天祭、クリスマスなど、イエス・キリストや守護聖者にまつわる祭である。これに対するもう1つの系列は、農耕や牧畜といった農民の伝統的生活と密接に結びついている世俗的行事である。たとえば「冬送りと夏迎え」、「聖ヨハネの日の火祭り」、あるいはファスネット (ファスナハト、謝肉祭) の仮面行事のように、しばしば教会側や当局から禁止や規制をくらった民間行事である。そして「教会行事となった年中行事にもすでに多くの民間信仰が習合して」いる、と谷口は見ている (谷口 1998)。

こうした見方は、まずは当を得たものと言えよう。ヨーロッパ文化においては、キリスト教的なるものが異教の神々や祝祭あるいは村落行事の数々を変容させていく過程が、いたる所で見られたに違いない⁴。たとえば新免光比呂がルーマニアの農村について明らかにしたところでは、生ける死者であるストリゴイという非キリスト教的な存在は、支配層のイデオロギーであるギリシア正教の影響下にあっても、キリスト教に統合されない異教的伝統ないし規範として維持されていた (新免 1990)。おそらくヨーロッパ各地において、大伝統たるキリスト教と小伝統としての異教的ないし土着的習俗のせめぎあいが見出されることであろう。

しかし、少なくとも中欧の年中行事においては、「異教」とか「土着」と呼ばれているものは、決して一枚岩ではない。そのことを指摘したのは、ヨーゼ

フ・クライナーである。クライナーは、きわめて示唆に富む一連の論文（1985、1991、1995）において、大要つぎのようなことを述べている。中部ヨーロッパを中心としたヨーロッパの年中行事は、ほとんどが11月から6月までの7ヶ月に集中している。そしてこの7ヶ月の間に、はっきりした3つの違ったサイクルを見分けることができる。その1つめは、クリスマスと正月を中心とした、11月から1月6日までの祭・行事のサイクルで、これは中欧の古代ゲルマン民族の正月であった冬至を中心としている。2番めのサイクルは、3月・4月あたりの復活祭を中心とするサイクルだが、復活祭は太陰暦で行っているため、日付は毎年動く。これは、古代ローマの正月であった3月1日を中心とする、地中海文化の正月行事である。そして最後のサイクルは5月の一連の祭を中心とするが、これは北欧ゲルマンの正月であった5月1日をめぐるサイクルである。

クライナーはこのように述べて、ヨーロッパの年中行事の中にいくつかの文化複合を見出すことが可能であることを指摘した。我々が今後ヨーロッパの祭や年中行事を見てゆく際、ぜひとも考慮しなければならない枠組みと言える。

もう1つ指摘しておかねばならないのは、民衆劇の歴史的変容である。ニコロ劇のような民衆劇の中に、人は往々にして異教的要素ないし土着的要素を見出しがちである。しかし、民衆劇というものも歴史的に形づくられてきたものであり、中世以来、外からの刺激を受けたり内的発展を遂げたりして変容してきたものなのである。オーストリアの民俗学者レオポルト・シュミットは、その浩瀚な著書『ドイツの民衆劇』においてそのことを詳細に跡づけた。シュミットによれば、村落において演じられる民衆劇の中には、都市での本格的な演劇にまで高められたものもあれば、カトリックの学校劇や教団劇から村へと移されたものもあった。たとえば後者の例である『イエーダーマン』はオランダからドイツ南部やオーストリアへと伝えられたし、『ドン・ファン』は17世紀のスペインから反宗教改革・カトリックの国々へと伝わった。そこでは旅回りの劇団などが大きな役割を果たしていた（Schmidt 1962:58）。このことは、オーストリア各地に分布するニコラウス劇（Schmidt 1962:316-317）についても言える。つまり、ニコラウス劇にはさまざまな時代に由来する諸形式が渾然

一体となっている。ニコラウス劇自体は18世紀初頭になって、反宗教改革の学校や修道院において演じられたが、ミッテルンドルフのニコロ劇も、こうしたニコラウス劇の受容された形の1つと見ることができるのである (Schmidt 1962 : 349)。要するに、我々が現在目にするニコラウス劇も歴史的な産物であり、そのことをしっかりと意識しなければならない、ということだ。村落の民衆劇は、都市のさまざまな民衆劇とも連絡を持っていたかもしれないのである (クレツェンバッハー 1988なども参照)。

(2) 仮面異装の意味

バート・ミッテルンドルフのニコロ劇で最も強い印象を受けるのは、そこに現れる数々の仮面異装の者たちの姿であろう。こうした仮面異装の意味について考えてみよう⁵。

ドイツ語圏の仮面習俗全体について、広い視野から論じたのは、博識で知られたバーゼルの民俗学者カール・モイリであった。モイリは『ドイツ迷信辞典』に書いた「ドイツの仮面」についての項目 (Meuli 1975) において、いろいろと面白い指摘をしている。たとえば、仮面という場合には顔面を覆うものだけを考えがちだが、そうではなく、顔に何かを塗ったり、目隠しをしたり、あるいは身体を覆う衣装全体も考慮に入れなければならないということ (Meuli 1975 : 69)。米国の国立博物館に務めていたウィリアム・ヒーリー・ドールが考案した仮面の3分類、すなわち顔につけるmask、顔につけず頭の上につけたり頭の下にぶら下げたりするmaskette、お面に似るものの、かぶったり着けたりせず建物の破風に飾ったりするmaskoidという分類もあるが (Dall 1884 : 93、木村 1994 : 31)、本稿の関心にとっては、モイリの指摘の方が重要である。身体全体を覆う衣装をも仮面の一種と見ることで、たとえば藁男シャープの着ている物も仮面ととらえることが可能になるからだ。

モイリはまた、未開社会におけるさまざまな仮面が、多くの場合においては祖霊ないし死霊を表していると論じている。彼によれば、世界的にみて仮面行事が行われるのは、(a)重要な人物の葬儀において、(b)定期的な祖霊祭、ことに

年末において、(c)ことにアフリカやメラネシアで顕著な傾向として、成人式において、である。そしてそうした諸行事においては、仮面をかぶった者は出会う者を(弱められた殺害として)打ったりする一方、生者は家に閉じこもったり、仮装者に飲食物や贈り物をしたりすることが見られる。仮面行事にはまた、「合法的無法」ともいうべき放縦状態を作り出すことで、社会の厳しい規則に抑圧された人々を開放的にする安全弁の役割もある。注意すべきこととして、仮面は元来男の領域ことに男子結社に属するものであった (Meuli 1975 : 69-76)。

こうしたモイリの指摘のうち、仮面が死者を表象するという見方に対しては、いやそうではなく、どんな仮面もそれが用いられる祭に応じた意味を持つのだというシュミットからの批判も出されている (Schmidt 1962 : 37)。しかし、ヨーロッパの新年行事に現れる仮面に限って言えば、モイリの指摘は正しいのではないかと思われる。というのも、クライナーがエリアーデを引きつつ論じたように、ヨーロッパの新年というのは、時の流れの「折り目」という、非常に危険な時期にあたり、世がその始まりに戻ってゆく。つまりそれは、あの世とこの世がまだはっきり分かれていなかった時代である。あの世とこの世はつながっているのだ、死者の霊たちがこの世を訪ねてくる。このような観念が、ヨーロッパの年中行事には広く見られるのである (クライナー 1991 : 4-5)。

このように考えるならば、仮装した来訪者が新年に訪れるという点において、日本の仮面習俗との比較がおこなわれてきたのもっともなことである。

ヨーロッパにおける仮面異装の者たちを日本における同様の仮装者と比較したのは、主としてヴィーンで学んだ民族学者たちであった。そのうちスラヴィクは、仮面習俗の背後には男子秘密結社の存在が考えられるとする岡正雄の考えをうけて (たとえば、岡 1994 : 131-132)、日本とゲルマンの祭祀秘密結社の比較をすすめる (スラヴィク 1984b)、両者の間には歴史的なつながりがあると想定するに至った (クライナー 1985 : 4)。それに対しクライナーは、中部ヨーロッパのドイツ語圏の民俗レベルの年中行事に、日本のそれとの類似性が多く見られるのは、「歴史的な関係があることよりもむしろ祭祀の構造的な理解として取り扱った方がよいと考え」ている (1995 : 131)。

クリスマスにかかわる諸習俗についてまとめた文化人類学者の葛野浩昭も、中部ヨーロッパの聖ニコラウスとその従者たちを日本のナマハゲやトシドンと比べる際に、歴史的関係よりも農耕社会における豊穡儀礼ということの共通性に目を向けている。葛野が挙げるのは、来訪者たち⁶が年の変わり目に人間の世界を訪問する点、来訪者たちが鬼のように仮面仮装のおどろおどろしい姿をもつ点、来訪者たちが子供を脅かしたり褒美を与えたりする点、村の若者たちの集団が来訪者たちに扮する点、という4点である（葛野 1998：34-54）。

日欧における仮面習俗の比較にあたり、農耕社会を基盤としたさまざまな構造的共通性を取り上げることの有効性は論をまたないが、歴史的な関係という可能性も排除されるべきではなかろう。その際、東欧から中央アジアにかけての資料が1つの手がかりを与えてくれるかもしれない。

たとえば、ハンガリー西部では（オーストリア由来の）ニコラウス仮装が行われている。それによれば、仮面異装の者たちが家々を回っては子供たちに恐怖心を吹き込むというので、1785年には禁令が出たほどであるが、今でもいくつかの地域で続いている。子供たちが顔面に紙の仮面を着け、羊皮を裏表に着て鎖を鳴らす所もあれば、木製の仮面を顔面に着ける所もあり、また青年たちが面白い言葉をかけながら娘たちの「告解を聞」こうとする所もあった（Dömötör 1989：48）。また、コーカサス地方の諸民族においては、若者たちの仮面習俗が豊穡儀礼や祖先崇拜と結びついた形で見出されている（Bleichsteiner 1952）。

おわりに

この報告をものするにあたっては、重要であるにもかかわらず参照できなかった文献が数多く存在する。たとえば、ニコラウス信仰とニコラウス習俗についての古典的な研究であるカール・マイゼンの著作（Meisen 1931）、レオポルト・シュミット編の『中欧における仮面』（Schmidt Hrsg. 1955）、ハンス・シューラーデンの『アルプス地域におけるニコラウス劇』（Schuhladen 1984）などである。これらの他にも、シュミットの『ドイツの民衆劇』にはミッ

テルンドルフのニコロ劇に関する多くの報告が引用されているが、人手できなかった。やはり、日本でヨーロッパの民俗を研究することの難しさを痛感する。いずれ、ヨーロッパに留学ないし長期滞在する中で、腰を据えてこうした問題に取り組んでゆく研究者が現れることを期待したい⁷。

ところで、いろいろな報告を見ると、ドイツ語圏における聖ニコラウスの祭もさまざまに変容していることがわかる。

たとえばドイツ西南部シュヴァーベン地方 (Schwaben) のエブハウゼン村 (Ebhausen) では、ニコラウス (この村では複数) 自身が乱暴者として12月5日の晩にあばれまわっていた。ところが、1949年の祭の晩にけんかがあり、1人のニコラウスと1人の観客が争いを始め、ニコラウスのかつらとあごひげを引きむしって、さらに仮面をはぎ取ろうとした。祭の仮面を取られることは習慣からいって非常な侮辱を意味していたので、他の2人のニコラウスがこの観客を殴りつけた。その後観客はこのことを裁判所に訴え、判決は観客の勝利で、ニコラウスは200マルクの罰金を課せられた。その結果、その後この村では青年たちの祭に対する意気が上がらなくなり、1957年には行われなくなった。ところが、翌58年には他地方からの移住者たちが生まれ故郷の習慣を持ち込み、おだやかな子供ニコラウスが家々を回ってお菓子をもらうという、まったく異なる祭が始まったのだった (坂井 1982 : 85-88)。

また、ドイツのバイエルン州南端、隣国オーストリアのザルツブルク近くに位置するベルヒテスガーデン (Berchtesgaden) では、第1アトヴェントに聖ニコラウスが、鬼の面をつけたクランプスや全身に藁をかぶったブットマンドル (Buttmanndl)、さらには妻であるニコロヴァイブル (Nikoloweibl) といった者たちを引き連れて行列する。そして良い子にはプレゼントを与え、悪い子にはお説教をし、改悛の様子が見えれば良い子同様にプレゼントを与える (Werner & Werner 1999 : 92-106)。ここのブットマンドルは、藁で包まれた藁男の姿をとることから、バート・ミッテルンドルフの藁男シャープとしばしば比較されてきた (Schmidt 1962 : 39, 263)。さてこのベルヒテスガーデンでは、クリスマス研究家の若林ひとみによれば、聖ニコラウスをしつげに

利用する家が増えている。そこで2003年、ザルツブルクのカトリック教会は、聖ニコラウス祭に際し、「クランプスはあまり子供を怖がらせないこと、聖ニコラウスを教育目的に利用するのはほどほどにすること」というコメントを発表したという（若林 2004：89）。

バート・ミッテルンドルフのクランプスや悪魔たちも、いずれ今の荒々しさを失ってしまうのだろうか。上に掲げたいいくつかの課題とともに、かの地の再訪を他日に期したいと思う。

謝辞

まずは、バート・ミッテルンドルフ村でお世話になったすべての方々に感謝したい。また本稿所載の地図作成は、東北大学大学院生の物部朋子・佐藤慎太郎両氏にお願いした。記して謝意を表したい。

注

- 1 これらの他、民族学者の岡正雄がウィーン留学時に見聞したオーストリアのいくつかの年中行事について記したエッセイ（岡 1979）の口絵と解説にミッテルンドルフのNikolo-Spielが出ており、写真（撮影は1976年12月6日）と文はボン大学の日本学者・民族学者ヨーゼフ・クライナーによる。同氏が翻訳にあたった、師であるアレクサンダー・スラヴィクの論文集『日本文化の占層』（スラヴィク 1984a）の口絵にもミッテルンドルフのニコロ芝居の写真と短い解説が寄せられている。これも撮影日時は1976年12月6日となっており、同氏によるものであろう。なお、氏の論文「中部ヨーロッパの年中行事」にもミッテルンドルフの聖ニコラウスが鬼をしたがえつつ説教する写真が見えている（クライナー 1991：6）。
- 2 人口と面積は、村役場のウェブサイトによる（<http://www.bad-mitterndorf.at>—2006年2月26日現在）。
- 3 原文は以下のとおり。

5. Dezember 5. Dezember 5. Dezember 5. Dezember

Das Mitterndorfer Nikolospiel
Altes Brauchtum im Steirischen Salzkammergut

Eingebettet zwischen dem mächtigen, hochaufragenden Grimming und dem behäbigen Lawinenstein liegt in den dunklen Vorwinternächten in tiefer Stille und ruhiger Beschaulichkeit inmitten froststarrer Felder und Wiesen der Ort Mitterndorf. Gedämpft dringt jeder Laut durch die Stille der frühwinterlichen Dämmerung, ab und zu ein leise huschender Schritt, eine verräterisch in den Angeln knarrende Tür. Nikoloabend!

Plötzlich zerreißt ein scharfer Peitschenknall, dem ein zweiter und ein dritter folgt, die fast beklemmende Stille. Schellengeläute und dumpfes Rollen mischt sich darunter und steigert sich zu wahrhaft höllischem Lärm. Der Zug des Nikolospieles kommt. Und da sind auch schon die "Schab", seltsame, ganz in Stroh gehüllte Gestalten mit riesigen, meterlangen Hörnern auf den Köpfen. Im Sechsertakt schnalzen sie mit ihren Peitschen und leise raschelt das Stroh, wie sie breit und behäbig dem Zug voranschreiten und die Straße freimachen. Paarweise folgen den Schab die übrigen Gestalten des Zuges. Da kommt erst der in Polizeiuniform gekleidete Quartiermacher—ihm obliegt die Ordnung des Zuges—mit dem Nachtwächter, der Laterne, Hellebarde und Horn trägt. Dann folgt der Schimmelreiter mit seinem Schimmel, den Federbusch am Haupt und als Zweiter der Bartel mit dem Korb voll Süßigkeiten für die Kinder. Er trägt eine von allen Seiten lächelnde Maske. Weiters sehen wir die Mesner mit ihren Klingelbeuteln, den Engel mit dem Sternengewand und der Lilie in der Hand, begleitet vom Rollenträger, der eine große Rute hat. Dann folgt in bischöflichem Ornat der heilige Nikolaus, dem der Herr Pfarrer zur Seite schreitet. Der Bettelmann mit seinem krummen Stock und der Tod mit der Sense sind das nächste Paar. Da ist noch die Habergeiß als Sinnbild der Fruchtbarkeit und der Schmied mit dem Hammer, ein rußiger Geselle, der alles annagelt (Anbannen). Ihnen folgen die Krampusse, als erster der Höllenfürst Luzifer persönlich mit einer Gabel; er wird mit einer Kette von zwei Krampussen gehalten. Neben ihm finden wir mächtig lang den Ehetöufel. Ihnen folgen paarweise die übrigen Krampusse mit ihren kunstvoll von heimischer Laienhand geschnitzten Masken. Zuletzt kommt noch der Nikolojäger, der für Ordnung bei den Krampussen sorgt.

In der großen Stube des Gasthauses ist schon dichtgedrängt eine große Schar Kinder versammelt. Sie versuchen mit Ihrem (sic!) mutigen Lächeln die Angst zu verbergen. Nun schnalzen schon die Schab dicht vor den Fenstern. In der Stube ist es ruhig geworden und am Kindertisch könnte man eine Stecknadel fallen hören. Mit kräftigen Schritten betritt der Quartiermacher die Stube. Er fragt den Wirt, ob er seine weißen (Nikolo) und schwarzen (Krampusse) Gesellen hereinlassen kann. Hat er die Zustimmung erhalten, so kommt schon der Nachtwächter mit seiner brennenden Laterne. Er gibt die Zeit an und macht, auf Feuer und aufs Licht achtzugeben. Ihm folgt der Schimmelreiter, der den vor den Tischen freigelassenen Platz umreitet und damit symbolisch die bösen Geister aus dem Raum vertreibt.

Mit jähem Ruck springt die Tür auf und herein stürmt der Rollenträger. Am Kindertisch wirkt sein Erscheinen erschreckend genug und ein paar der Jüngsten verschwinden schon jetzt unterm Tisch. Nur vorsichtig lugen sie heraus, wie der Engel den schrecklichen Gesellen abweist und dann mit einem ehrwürdigen "Gelobt sei Jesus Christus" der Bischof Nikolaus mit dem Pfarrer erscheint. Mit ruhiger und fester Stimme richtet jetzt der Bischof seine befehlenden und ermahnenden Worte an Kinder und Erwachsene. Am Schlusse seiner "Predigt" bittet er den Herrn Katecheten, die Kinder zu prüfen und Nachschau zu halten, was sie in der Schule gelernt hätten. Ist diese Prüfung zur Zufriedenheit des hohen Herren verlaufen, ist es Zeit für den Bartel, der seine ewig lächelnde Maske und den großen Buckelkorb durch die Türe schiebt. Lange Haarsträhnen fallen ihm über das Gesicht und seinen Schafpelz. Noch verteilt er seine Gaben an die Kleinen, da ertönt eine klägliche Stimme: "Herr Pfarrer, Herr Pfarrer, Herr geistlicher Herr, bitt gar schön, kemmans a weng (sic!) her". Mit diesen Worten meldet sich der Bettelmann zu seiner "Beicht". All seine Schandtaten erzählt er nun, wobei er immer bemüht ist, seine Vergehen so harmlos als möglich hinzustellen. Und nun vollzieht sich auf engem Raum in der rauchigen Wirtstube das Schicksal eines uralten Jedermann, das Sterben des armen Mannes, der sich Zeit lassen

will und nicht wahrhaben mag, daß er allezeit abberufen werden kann. Mitten in seinem Dialog erscheint hinter ihm der Tod mit geschwungener Sense und setzt seinem Leben ein Ende. Sofort erscheinen zwei Krampusse, die ihn aus der Wirtstube zerren. Nochmals richtet der Bischof ernste und ermahnende Worte an alle Versammelten, sie mögen sich das eben Geschehene zu Herzen nehmen. Dann verläßt er mit dem Pfarrer das Lokal.

Nun ist der Platz frei für die Mächte der Finsternis und schon stürmt murrend und stampfend der "Eheteufel" über die Schwelle. "Ich bin der Teufel in der Eh (sic!)", so beginnt er seine Predigt, in der er erzählt, wie er es anstellt, um eine Ehe zu zerstören. Draußen ist es indessen immer unruhiger geworden. Luzifer läßt sich beinahe nicht mehr halten und sobald der Eheteufel geendet hat, stürzt er, die zwei Krampusse, die ihn an der Kette festhalten, mit sich reißend, in den Raum. Wild stößt er seinen Dreizack in den Boden und wild ist seine "Predigt", die er nun hält. Schließlich fordert er die draußen wartenden Krampusse auf, hereinzukommen und gleich alle, die hier sind, in die Hölle mitzunehmen. Ein wilder Tumult entsteht. Mit den Krampussen ist nicht zu spaßen. Sie haben eine gute Rute, die weh tut, wenn man sie zu spüren bekommt. Unter dem Tisch kriecht mittlerweile der Schmied herum, ein rußgeschwärzter Geselle, der alles festnagelt (anbannt), was sich zu verstecken suchte. Die Habergeiß hat es auf Frauen wie Männer abgesehen.

Doch da ertönt das Hornsignal des Nachtwächters, das dem Spuk ein Ende bereitet. Ungern verlassen die Krampusse den Raum, ihre Herrschaft ist zu Ende. Sie stürmen hinaus zu den Schab, die draußen im Freien gleich riesigen Dämonen Wache halten. Von neuem formiert sich der Zug und weiter geht es zum nächsten Wirtshaus. Das ist in kurzen Worten das Mitterndorfer Nikolospiel.

Dieses Spiel erhält durch die wertvollen, aus Holz geschnitzten Masken und durch die jedes Jahr gleichbleibenden, von altersher überlieferten Texte, die sorgsam gehütet werden, einen ganz eigenen Charakter. Es ist nur zu hoffen, daß dieser echte Brauch in seiner urtümlichen Form in Mitterndorf noch recht lange erhalten bleibt.

Die Mitterndorfer Nikolospielgruppe

Für eventuelle Unfälle wird nicht gehaftet!

- 4 若き日の柳田国男に強い共感をもって読まれたハインリヒ・ハイネが『流刑の神々』において「キリスト教が世界を支配したときにギリシア・ローマの神々が強いられる魔神（デーモン）への変身」（ハイネ 1980：125）を嘆いたことが想起される。
- 5 仮面に関して全般的には、大林 1998：126-167、佐原 2002などを参照。仮面についての欧文文献リストとして、疎漏もあるがSchaedler 1999：428-460が参考になる。
- 6 葛野は「神々」としている。以下の「来訪者たち」についても同様。
- 7 たとえば平賀英一郎はそうした研究の先駆者と言えよう（平賀 1988、2000など）。

【引用文献】

- Adler, Katrin. 1999. *Masken aus Europa*. (Bilderhefte der Staatlichen Museen zu Berlin-Preussischer Kulturbesitz ; Heft 90). Berlin : Staatliche Museen zu Berlin Preußischer Kulturbesitz / Museum Europäischer Kulturen.
- Baedeker. 1997. *Österreich*, 8. Aufl. (Baedeker Reiseführer). Stuttgart: Baedeker.
- Bleichsteiner, Robert. 1952. Masken- und Fastnachtsbräuche bei den Völkern des Kaukasus. *Österreichische Zeitschrift für Volkskunde*, 6 : 3-76.
- Buschan, Georg. 1922. Kirchliche und bürgerliche Feste. In: Buschan, Georg (Hrsg.), *Das deutsche Volk in Sitte und Brauch* : 13-124. Stuttgart : Union Deutsche Verlagsgesellschaft.
- Dall, William Healey. 1884. On Masks, Labrets, and Certain Aboriginal Customs, with an Inquiry into the Bearing of Their Geographical Distribution. In : *3rd Annual Report of the Bureau of Ethnology to the Secretary of the Smithsonian Institution, 1881-82* : 67-204.
- Dömötör, Tekla. 1989. *Ungarische Volksbräuche*. (Ungarische Volkskunst). Budapest : Corvina.
- 遠藤紀勝 1990『仮面：ヨーロッパの祭りと年中行事』（現代教養文庫；1365）東京：社会思想社.
- Erich, Oswald A. & Richard Beitzl (Begr.) 1974. *Wörterbuch der deutschen Volkskunde*. (Kröners Taschenausgabe ; Bd. 127). Stuttgart : Alfred Kröner Verlag.
- 福嶋正純（文）遠藤紀勝（写真）1990「魔物たちの夜：聖ニコラウス祭の習俗」『季刊民族学』51：6-23.
- Grimm, Jacob. 1875-78. *Deutsche Mythologie*, 4. Aufl. Besorgt von Elard

Hugo Meyer. 3 Bde. Berlin : F. Dümmler.

芳賀日出男 2003『ヨーロッパ古層の異人たち：祝祭と信仰』東京：東京書籍。

ハイネ、ハインリヒ 1980『流刑の神々・精霊物語』（岩波文庫）小沢俊夫（訳）
東京：岩波書店。

平賀英一郎 1988「乞食のクラウス：ドイツ・ニコラウス習俗考」『季刊人類学』19(4): 215-250.

—— 2000『吸血鬼伝承：「生ける死体」の民俗学』（中公新書；1561）東京：中央公論新社。

木村重信 1994『民族美術の源流を求めて』東京：N T T出版。

クライナー、ヨーゼフ 1985「ヨーロッパの来訪神信仰」『駒沢大学 文化』8：1-25.

—— 1991「中部ヨーロッパの年中行事」『民俗学研究所紀要』15：1-19.

—— 1995「中部ヨーロッパの年中祭祀」川田順造（編）『ヨーロッパの基層文化』：109-132. 東京：岩波書店。

クレツツェンバッハー、レオポルト 1988『民衆バロックと郷土：南東アルプス文化史紀行』河野真（訳）名古屋：名古屋大学出版会。

葛野浩昭 1998『サンタクロースの大旅行』（岩波新書；591）東京：岩波書店。

Mannhardt, Wilhelm. 1905. *Antike Wald- und Feldkulte aus nordeuropäischer Überlieferung erläutert*, 2. Aufl. (Wald- und Feldkulte ; 2. Bd.). Berlin : G. Borntraeger.

Meisen, Karl. 1931. *Nikolauskult und Nikolausbrauch im Abendlande. Eine kulturgeographisch-volkskundliche Untersuchung*. (Forschungen zur Volkskunde ; 9/12). Düsseldorf : Schwann.

Meuli, Karl. 1975. Die deutschen Masken. In : Gelzer, Thomas (Hrsg.), *Karl Meuli Gesammelte Schriften*, 1. Bd. : 69-162. Basel : Schwabe.
(初出はMaske, Maskereien. In: Bächtold-Stäubli, Hanns Hrsg., *Handwörterbuch des deutschen Aberglaubens*: 1744-1852. Berlin: Walter de Gruyter, 1933).

- 大林太良 1998『仮面と神話』東京：小学館。
- 岡正雄 1979「オーストリアの冬春の頃」岡『異人その他：日本民族＝文化の源流と日本国家の形成』：283-287. 東京：言叢社. (初出は『日本民俗学大系 月報』6、1959).
- 1994『岡正雄論文集 異人その他 他十二篇』(岩波文庫) 大林太良(編) 東京：岩波書店.
- 佐原真 2002「総論：お面の考古学」佐原真(監修) 勝又洋子(編)『仮面：そのパワーとメッセージ』：19-43. 東京：里文出版.
- 坂井洲二 1982『ドイツ民俗紀行』(教養選書；46) 東京：法政大学出版局.
- Schaedler, Karl-Ferdinand. 1999. *Masken der Welt. Sammlerstücke aus fünf Jahrtausenden*. München: Wilhelm Heyne Verlag.
- Schmidt, Leopold. 1962. *Das deutsche Volksschauspiel. Ein Handbuch*. Berlin: Erich Schmidt Verlag.
- Schmidt, Leopold (Hrsg.) 1955. *Masken in Mitteleuropa. Volkskundliche Beiträge zur europäischen Maskenforschung*. (Verein für Volkskunde, Sonderschriften ; 1). Wien : Verein für Volkskunde.
- Schuhladen, Hans. 1984. *Die Nikolausspiele des Alpenraumes. Ein Beitrag zur Volksschauspielforschung*. (Schlern-Schriften ; 271). Innsbruck : Universitätsverlag Wagner.
- 新免光比呂 1990「ルーマニアの農村共同体における異教的慣行の意義について：葬送儀礼を中心として」『宗教研究』284：1-16.
- スラヴィク、アレクサンダー 1984a『日本文化の古層』住谷一彦／クライナー・ヨーゼフ(訳) 東京：未来社.
- 1984b「日本とゲルマンの祭祀秘密結社：一つの比較研究」スラヴィク1984a: 43-159. (Kultische Geheimbünde der Japaner und Germanen. *Wiener Beiträge zur Kulturgeschichte und Linguistik*, 4: 675-763, 1936).
- 谷口幸男 1998「ヨーロッパの祭り：プロローグ」谷口／遠藤 1998: 4-10.

谷口幸男／遠藤紀勝 1982『仮面と祝祭：ヨーロッパの祭にみる死と再生』
東京：三省堂.

—— 1998『図説 ヨーロッパの祭』東京：河出書房新社.

手塚富雄／神品芳夫 1993『増補 ドイツ文学案内』（岩波文庫；別冊3）東
京：岩波書店.

若林ひとみ 2004『クリスマスの文化史』東京：白水社.

Werner, Paul & Richilde Werner. 1999. *Weihnachtsbräuche in Bayern.*
Kulturgeschichte des Brauchtums von Advent bis Heilig Dreikönig.
Berchtesgaden : Plenk.

Wrede, Adam. 1935. Nikolaus, hl. In : Bächtold-Stäubli, Hanns (Hrsg.),
Handwörterbuch des deutschen Aberglaubens, Bd. 6 : 1086-1107.
Berlin : Walter de Gruyter.

St. Nikolaus and his Masked Followers: A *Volksschauspiel* in Bad Mitterndorf, Austria

Hitoshi YAMADA

The present paper reports the *Volksschauspiel* (folk drama) played on December 5, 1999, in Bad Mitterndorf, Austria. In the drama called *Nikolenspiel*, played annually on the evening of the above mentioned date (Nikolaus' Eve), appear several masked and disguised figures along with St. Nikolaus. Especially demon- or devil-like creatures that threaten women and children with their whips, among others, have been of particular interest among folklorists and ethnologists studying the drama. Some researchers have asserted that they represent pagan elements surviving in St. Nikolaus cult, which in itself builds a form of Christian belief. Though this argument is to be agreed with, the present paper pointed out that two aspects should also be taken into consideration.

First, as is discussed by Josef Kreiner, Middle European new year festivals derive from at least three traditions: 1. Ancient Germanic new year rites between November and January 6; 2. Ancient Roman or Mediterranean new year ceremonies in March and April including the Easter; 3. Nordic or Scandinavian new year customs in May. Such distinctions between several "pagan" traditions in European festivals should be kept in mind.

Second, folk dramas in German-speaking countries have seen historical changes since the Middle Age, as Leopold Schmidt's study well illustrates. Some of the dramas such as *Everyman* were originally performed in cities, Catholic schools or cloisters and then adopted in the countryside. This means that the *Nikolenspiel* in Bad Mitterndorf too, in spite of its apparent antiquity, might have undergone modifications and innovations in the past centuries.

The wooden masks used in the drama, often compared with those used in some Japanese festivals, seem to stand for the ancestors or the dead that revisit their survivors at annual intervals. Whether there have been historical connections between these Western and Eastern parallels remain open to further investigations.